

2019年11月10日（日）
東京大学東洋文化研究所

2019年11月10日（日）東京大学東洋文化研究所にてワークショップ「音楽とグローバル関係学」が開催された。はじめに、司会の福田宏氏より趣旨説明が行われた。グローバル化する世界では、研究においても様々な地域の事例を総合的に見ていく視点が求められる。本ワークショップでは、「音楽」というキーワードを通して世界各地の事例や実践に関する6つの報告がなされた。

第1セッションでは、パレスチナ、ユーゴスラヴィア、日本とブラジルにおけるローカルな音楽実践を紹介した。まず、山本薫氏（報告：「中東におけるラッパーパレスチナのラップグループDAMの音楽実践に見るグローバルとローカルの交渉」）は、1990年代以降に中東地域でも定着したラップ音楽を事例にあげた。ラップというグローバルな音楽を用いることで、世界に向けて発信すると同時に、自らの帰属するコミュニティを再定義するプロセスにもなっていると述べた。続いて、山崎信一氏（報告：「「ユーゴスラヴィア」の担い手としてのロック音楽」）は、社会主義期のユーゴスラヴィアにおけるロック音楽の変遷について報告した。パトリオティックな楽曲がユーゴスラヴィア全体で受容された一方で、紛争後の同地域におけるロック音楽は当時の民族共存へのノスタルジーとも結びついて共有されているという。輪島祐介氏による報告（『世界の人人々に音楽の喜びを！』：日本とブラジルにおける国際歌謡祭）では、1960年代後半～70年代に流行した国際歌謡祭が、日本とブラジルではむしろナショナルな音楽ジャンルの形成に寄与したことが議論された。

第2セッションでは、「国歌」を通して音楽と国家との関係に注目した。辻田真佐憲氏（報告：「先駆的な洋楽受容としての君が代」）は、なぜ「君が代」が国歌に選定されたのかという問いのもとでその制定過程をひもといた。歌詞に和歌を用いたことで文学的論争が回避された一方で、音楽面では様々な改良がなされた点が大きいと結論付けた。梶さやか氏（報告：「ナショナルな語りと歌いの伝播？ーポーランド国歌を例に」）は、現ポーランド国歌が分割時代の民族的ナショナリズム、すなわち「ポーランド未だ滅びず」という愛国的スローガンといかに結びついたのかを歴史的に解説した。そしてこのスローガンが、国歌を持たない他の民族のナショナリズムにも影響を与えたと指摘した。福田義昭氏（報告：「アラブ諸国国歌研究の課題と展望ーエジプト国歌の事例を中心に」）による最終報告では、近年増えつつあるアラブ諸国の国歌研究を行う上で重要となりうる課題や分析、問いなどが提示された。

最後に、芝崎祐典氏と井上貴子氏によるコメントを受けて総合討論を行った。普遍的な音楽要素が個々の文脈で再生産され意味を持っていく過程で生じる複雑な関係性を、地域研究と音楽学の広い視点からいかに見ていくかといった大変刺激的で活発な議論と問題提起がなされた会となった。

（文責：南部真喜子）